

今回は現場で働く中でなぜ福祉という仕事に就いたのか、同じ法人、部署にいてもそれぞれ目指 した志やきっかけは様々であると思います。今回は理事長、援護寮はばたきの3年目の職員に聞い てみました。また、記事の後半の「こらむ」では地域活動支援センターⅠ型ふらっとの利用者さん に「自分の今の楽しみ」を教えて頂きました! ぜひご一読ください(\*'▽')♪

### 【医療も福祉も「なりゆき」だったかな?!】

#### ~時折、「決断」とか「苦難」あったけど…~

振り返るに、いつも行き当たりばったりであったような気がします。そりゃー悩んだことも幾度かあったけど…。悩んだとき、あるところまでいくと「どうなるもんでもねぇーだろう」といったところに行き着くと、その瞬間、思考を停止してしまうのです。

そんでもって成り行きに身を委ねれば、「なんとかなるんさ」と。不思議なもんで、これでなんとかなってきたんです。そんなわけで「ナゼ、福祉の仕事を」というテーマへの応えにはそぐはない結果になりそうですけど…。応えがあるとすれば、「社会の<片隅>で決して華やかではないけど少しだけ風変わりに生きている人たちが好きだった」ということでしょうか?まぁー「成り行き人生」をかいつまんでお話すれば、「福祉の世界」にたどりついたいきさつがわかってもらえるかと思います。

初めての就職は、精神科病院でした。20代後半。なんせ、この頃は日々の生活に困り果てている有様だったため、知人の「群馬に面白い病院がある。なんとかなるかも?」という一言を頼りに東武線太田駅に降りたったわけです。目指したのは三枚橋病院という精神科病院。即決でバイト雇用が決まり、病院勤めが始まりました。働き始めると意外と面白くて…(妄想めいたことを延々と喋りまくる人の話が面白くて、聞いているうちに快い気分になって眠ってしまったこともありました)。いろんな人たちがいて、話を聞いてるだけで一日が過ぎていく妙な体験でした。

丁度、一年経ったとき、「アルコール担当をやってくれ?」と院長に頼まれ、<成り行き>で引き受け、この病院に腰を据えることになりました。それにしても「入院から退院まで全てを任せる」と言われたときにゃー<無茶を通り過ぎて唖然(あぜん)>でしたね。

半年経つか経たないうちに「こりゃー自分にできることなんて、たかが知れてる」と気づきます。 < 酒を止めようと(少なくともそう思っている人)に入院中にできることはなんにもない、退院してからが本番だ>と(当たり前のことだけど)、そう気づかされ、当時、黎明期(れいめいき)であった「地域断酒会」を創ることに力を注ぎました。思えば、この頃に「互助(自助)」とか「当事者が主役」という考え(その大切さ)が芽生えたように感じます。いろんな事があったけど、本題へと急ぎます。7~8年経過した頃から「院内作業所」が創られることになりました。「日銭作業所」と呼ばれた場は、毎日20名位の外来者が通ってきていました。でも「病院内」に作業所は、いかにも「ヘンだ!」ということで病院近くに「麦の家」が様々な



人たちの協力を得て設立されたのが1986年(S61)のことです。サンマイバシというところは不思 議で何かをやり始める際、誰ともなく雑談風に言い出したことがいつの間にか行動に移っていて形 が出来上がっていくのです。「麦の家」の時も同じ具合で開設半年前になって「誰がやるの?」と。 「そうだね、誰かがやらないと」って…。結果として私が赴任することになりました(これも成り 行きだぁー)。余談ですが給与はグーンと下がり、10万そこそこ(これも「成り行きだからシャー ない!」って感じでした)。それでも心のどこかに「10年やれば、先は見えてくる、病院勤めに 区切りをつけてみるのもいいかな」って気持ちがあったのでしょうね。

「麦の家」勤務はわずか3年で終止符をうち、サンマイバシに舞い戻り。結成された組合活動に 約10年間没頭することになります(この間のいきさつは省略しますが)。

現在の社会福祉法人を創設し、障がい者福祉に取り組むようになったのが2000年(H12)のこ と。「ナンデ?」と聞かれると意外と答えは簡単。

精神科病院という器の中で「病院精神医療」に「限界」を感じていたからです。より正確にいう と、「精神科病院は急性期に対応すること」が大切で、それ以外の役割はあまりない。更に大切な のは退院後、地域社会でどう支えていくか?こんな思いを抱いていた訳です。このことは「共同住 居活動」などを通して学びました。

その意味では「病院精神医療の限界」というより「限定的(役割)」といった方が適切でしょう。 付け加えると病院に身を置くことに「限界」を感じていたのは私自身かもしれません。「限界」を 抱きながらやるより、可能性がある「場所」の方がオモロイだろうって感じだったかな?

前段階として、1997年(H9)、医療法人の「福祉部門」なる名目で援護寮(あかまつ)が開設 されました。当時、組合執行委員長であった私は、「福祉部門統括者」として引っこ抜かれること になるわけです。内心「病院敷地内に福祉施設なんてアホなこと」と思いながらも、このとき、2 ~3年先には病院から地域へ飛び立つチャンスだと直感しました。

これが約半世紀(丁度、半分に分けられる)に及ぶ私の「病院精神医療」と「地域福祉」のいき さつです。「医療から福祉へ」というのは、どうもしっくりこない。おそらく、この一連の流れも、 「決意・目標」をもってなされた行為でなく、「成り行き」だったと思われます。

職員や読者の皆様は、少しガッカリされるかもしれません。並々ならぬく決断・目的意識>を もって<福祉の世界>に足を踏み入れたのだろう…それを聞きたいと思っているかもしれませんが、 そう簡単に期待に応えられるような話は出来るもんではありません。世の中、そういうことが一杯 あり、他人が<期待するような応え>を出すために人は生きている訳じゃないのです。ましてや小 生、そんな「優等生」じゃありませんから…。

最後に二つほど、付け加えておきます。

一つ目。かっての「医療の世界」より今の「福祉の世界」(あえてこの言葉で表現しますが)の 方がのんびりとしていられるということ。「世界」が広いと感じます。

二つ目。「成り行きまかせ」をやたらに強調してきました。無理やり、こじつけた訳ではなく、 自然な気持です。「成り行きまかせ」だから、悔いがない。私がこれまで「生きてきた過程」で 「後悔」という二文字は見当たらないのです。傲慢(ごうまん)かな?と思いますが…直感を大切に して、信じろ!ってことかな?最後に次の言葉を送ります。

#### 今、アデンに着いた 誇るに足りるものは何ひとつない

ポール・ニザン《アデン・アラビアより》

理事長 中田 駿



# M E R R Y X M A S

## HAPPYHOLIDAYS

### ~何故、福祉職を目指したか~

社会福祉法人アルカディアに勤務して早や3年が経とうとしています。今回このような機会をいただき「なぜ福祉職を目指したのか」を思い返すことで、初心に返る良い機会になりました。

私が、福祉職を目指すきっかけとなったのは大学生の頃です。私は大学で心理学を専攻 しており臨床心理士の取得を目指していました。

小さいころから将来は臨床心理士として司法や医療の分野で働きたいと考えていました。 しかし、大学での学びを深めていく中で精神保健福祉士という資格を知りました。当初は、 「どのような資格かよくわからないけど、国家資格だし取っておいて損はないかな」とい う軽い気持ちで授業を受けていました。しかし、受験資格を得るために実習があり、その 実習での出会いが福祉職を目指すきっかけとなりました。それは利用者Aさんとの出会い でした。

この実習で個別支援計画を立案するという1つの目標があました。その個別支援計画のための面談などをお願いしたのがAさんでした。Aさんとの面談でこれからの目標について話していると、Aさんから「一生このままの生活を送りたい。それが私の望みです」という言葉が聞かれました。その言葉を聞いたとき私は衝撃を受けました。学校の授業では「お金や薬の管理ができるようになりたい」、「料理が作れるようになりたい」など、すごくわかりやすい目標を立てる練習をしていたので「一生このまま」という言葉を聞いたとき「一生このままってなんだ…、どうしたら良いのだろうか…。」と頭を抱えました。

その時に、私は利用者さんに対して悩んでいること、困っていること、できること、できないことにしか焦点を当てておらず、その人自身の生活や今までの人生、周囲の環境、関わっている人たちがどんな人なのか知らないということに気づいたのです。このことから、福祉とはその人を多面的にとらえ、様々なことを複合的に考えてその上でそれぞれの個性と強みを上手く活用できるよう支援していくことなのかもしれないと思うようになりました。とても難しい事ではありますが、自分自身で様々な人と関わることで多くのことを学び、それにより自身の価値観を広げ多様性を受け入れることでよい支援につながるのではないかと考えます。Aさんのような思いをしている人に対し少しでもその人が望んだ生活が送れるように支援がしたく、それが福祉職を目指すきっかけとなりました。

現在、生活支援員として様々な事を経験しています。仕事をしていると多くの悩みが出てきます。支援の正解は1つではないため、支援をして良い方向に向かったとしても、本当にこれでよかったのか、もっと良い方法があったのでは?と常に考え悩む日々を送っています。しかし、そのような悩みもAさんのような人に対し少しでも支援に繋がればと思い日々努力をしています。そんな日々の中、一番良かったと思う瞬間は利用者さんの笑顔や「ありがとう」や「助かりました」という言葉を聞いた時です。このような時、不思議なことに悩んで苦しくなっていた思いも吹き飛んで次も頑張ろうと思えるようになります。

初心を忘れずに、そして今まで関わってきた人たちや今後関わる人たちの笑顔のためにもこれからも頑張っていきたいと思います。

援護寮はばたき 楠原 葵



# HAPPYHOLIDAYS



### ふらっとの利用者さんに聞いてみました! 『自分の今の楽しみ♪』

\*私の一番の楽しみは食べることです。甘いものが好きで特にアイスクリーム。一度に6個くらい食べてしまうこともあります。今一番興味があることとしては、ふらっとプログラムのスマホ/パソコン教室に参加することです。ゲームをしたり音楽を聴いたり。職員に聞きながら新しいことを覚えていくのが楽しいです。【60代女性】

梨しい時

輝うこと ぬり絵

愛犬 3匹との時間

トイフロードル16オ保護犬12オくらい

【30代女性・本人直筆】

コロナ禍が続いていますが、 楽しみを見つけているようですね。

#### 【その他 利用者インタビュー】

- \*コロナ対策しながら作業所で食べるお菓子
- \*コロナ対策しながら友達と集まったりしていること
- \*散歩に行く機会が増えて写真をよくとるようになった
- \*最近はコタツに入ってワールドカップをみてる
- \*ふらっとで外出プログラムに出かけられると楽しい

### 

なってから色々なアニメを観るようになりました。現在は実習中であまり観る時間がないのですが「チェンソーマン」と「ブルーロック」は毎週の密かな楽しみになってます。

# 編集後記

当法人で働くまでの経緯や福祉職をなぜ目指したのかを聞いてみると、行き当たり ばったりや成り行きといった意見がうかがえました。当事者と支援を通して関わる中で、次第に理念や信念を感じていったこと。実習中の出来事に影響を受けて支援についての 考え方や捉え方が変わっていったことなど、勿論のことですが十人十色なことがわかりました。それぞれの経験を活かしながら同一法人で働く仲間として、同じ目標に向かっていくこと、協力していくことがこれからも必要なことだと思います。

「こらむ」では『今の楽しみ』を教えて頂きました。活動自粛や体調管理に苦労されている期間が続いておりますが、その中でも楽しみを見つけながら生活を送っていけることを大切に感じております。

ニュースレター編集委員

法人本部:群馬県太田市鶴生田町733-123 TEL:0276(20)2509 FAX:0276(20)2510

ホームページ: http://arcadia-gr.com/